

わたしの京都

河野裕子

梅やお札のこと―北野神社

北野神社は北野天満宮ともいう。京都では、天神さんと呼んで親しまれている。天満宮と名のつくものは菅原道真の霊を祀ったものであり、全国に数多くあるが、その発祥は北野天満宮である。藤原時平の讒言にあつて九州・大宰府に流され、その地で口惜しい死に

方をした道真は怨霊となり、都に様々な災いをもたらした。その鎮魂のために、北野神社が北野天満宮となったのは千年ほど前のことである。もともと北野神社は農耕を祈るための神社であり、境内に牛の像が多いのはそのためらしい。

京都には怨霊を祀る神社が二十五もあるそうだ。私の家の近くにも崇道天皇を祀る崇導神社があり、これが怨霊指定第一号。真夏の

ある日、行ったことがあるが、昼間でも参道が薄暗く、背中がゾクゾクする感じだった。それにひきかえ北野神社は、殺風景なくらいあつからんとしている。

北野神社に活気があるのは二十五日の縁日の日。なぜ二十五日か調べてみたら、菅原道真が生まれた日、大宰府に流された日、命日が、みんな二十五日だったからだという。

二十五日の縁日は凄い人出で、自転車で行ったらとても進めない。人波に押されながら露店を眺めて歩くのが楽しい。いろいろなお店が出るが、植木の市もたつ。何年前か、ここで苗木を買って庭に植えた。今のこの家に引越したばかりのことで、ちよつとハイになってたくさん買い込んだのだが、その中に

白梅、紅梅、臘梅もあつた。天神さんで梅の木を買わないことはない。梅はバラ科、臘梅はロウバイ科で梅の仲間ではないのだが、梅というからにはやはり梅なのだと思つている。

境内と梅林には三千本の梅の木があるという。ふだん殺風景な北野神社も梅の季節には華やぐ。あたり一面に梅の香りがする中を、一本一本の梅の木を見上げ、愛でながら歩く。一本ずつ花の色かたちがちがう。遅咲きもあれば、早咲きもある。見事に咲いた木には、アマチュアカメラマンとおぼしい人々が、齧り付くように何人も押し寄せていて、びっくりしたことがある。

梅三千本。白梅は清楚、紅梅は可憐で華や

か。しかし、梅の季節は、一月、二月、三月と花期は長いが、まだ寒い季節である。桜の頃のような浮かれた気分にはなりにくい。寒い空や冬枯れの風景を背に咲く梅は地味な花で、そんなに目立つというものでもない。四十歳を過ぎようとする頃だっただろうか、不意に梅の花が見え始めた。それまでは花は桜だった。梅の静かなたたずまいの良さがここに沁みるように見え始めたとき、加齢とともに風景に奥行きができるのだということに気づいた。

北野神社の前を何年か、週のうち半分くらいは通っていた。神社のちかくに北野塾という塾があり、子供たち二人がここに通っていて、車で送り迎えることがあったからである。

わが家は北野塾と縁がふかい。夫の永田和

宏が二年半通った。その後、東京から大学に戻り無給の研修生であった間、北野塾で数学と物理の講師を三年間務めた。北野塾は塾生が三十人足らずの塾であったが、講師の給料がよく、これで私たちの生活がどんなに助かったことかしのれない。父が学び、自分自身がそこに戻って講師となり、また子供たちが同じ塾に学ぶ。あまり例のあることではあるまい。

塾長の片田清先生という人が破格に変わった人で、この先生については機会があれば、ぜひどこかに書いて残しておきたい。塾はお寺の中にあり、初期のころは本堂で授業をしていた。片田先生は生涯独身で、一万点に及ぶ文学全集と、重ねて六十メートルの高さになるレコード、同じ量のCDの収集を遺された。

た。それは京大付属図書館に寄贈された。この北野塾では北野天神のお詣りは恒例の行事で、私たちも家族みんなで絵馬をかけたお札を貰ったりにつきあったものである。

終しまい天神時雨のなかにもう咲ける冬とうじ至
梅ばいあり絵馬堂の裏 永田和宏「饗庭」

こんな歌があるから、私たちは十二月にお詣りに行っているはずである。「饗庭」を読み返すまでこのことを忘れていた。

「勸学守護」の札灼けいたり出てゆきし
子の部屋に低く西日射しいつ 同「荒神」

息子のほうは大学在学中に家を出て下宿生活を始めたが、この歌は息子が出て行くつぎの頃の歌だと思ふ。この歌を読むたびに、勉強部屋の柱に貼ったお札に向かって神妙にお辞儀をしていた高校生だった息子の姿を、妙に可笑しいような悲しいような気持ちで思い出す。もちろん彼は私に見られていることには気づいていなかった。ふだんはお札のことなど何とも思っていない様子をしていただけに、やっぱりお札は大事なお守りだったのである。その息子も二十九歳になり、二人の子供の父親になった。

(かわの・ゆうこ「塔」選者)